# 自分の言葉？

## ―知の営みに参加するために―

# 他人の言葉？

東京大学教養学部
英語部会／グローバルコミュニケーション研究センター

# 自分の言葉？
## ―知の営みに参加するために―
# 他人の言葉？

東京大学教養学部
英語部会／グローバルコミュニケーション研究センター

目次

はじめに Preface

1. 文献を表示する―APA 形式― 3
Documenting sources:
APA formatting and style guidelines

2. 要約 4
Summarizing

3. 言い換え 5
Paraphrasing

4. 引用 7
Direct quotation

5. 翻訳 11
Translation

6. 剽窃 13
Plagiarism

7. 出典表記と文献一覧 15
Citation and references

7.1 本文中の出典表記
In-text citation

7.2 文献一覧
Reference list

7.3 日本語その他の非英語文献
Citing non-English sources

7.4 文献情報管理ソフトウェア
Reference management software

8. もっと詳しく知りたい人は・・・ 29
To find out more . . .

# はじめに Preface

学問の世界に身を置いて、知的活動に従事しようとする際には、まず、これまでにどのような研究が行われ、どのような成果が蓄積されているのかを参照する必要があります。それは、自分自身の知的営みを、学問の世界の中に位置づける作業であり、学問の世界に対して、自分が何を貢献できるのかを確認することでもあります。もちろん、学問の世界で共有されている知識や物事の考え方を学ぶことによって、自分自身の知的視野を拡大し、発想を豊かにできるのは言うまでもありません。

学問の世界における研究の成果は、本や論文（これを一般に「文献」といいます）の形で公表されています。これらを適切に参照し、参照した事実を明示することが、学問の世界に加わるにあたっての基本的な心がまえの一つとなります。研究成果の評価は、これまでの文献をもとに構築された「あなたの新しい考え」が優れているかどうかによって半ば決定されるため、皆さんは自分の論文の中のどの考えが自分独自のもので、どの考えが他の文献に典拠するのかを明確に示さなくてはなりません。この区別が曖昧で、もし借用した考えをあたかも自分自身の考えであるかのように紹介したら、皆さんの行為は剽窃（ひょうせつ）と呼ばれる可能性があります。剽窃は倫理的な罪であり、厳しい処罰の対象となります。剽窃の罪を避けるためには、他の人の著作を要約、言い換え、引用する際に細心の注意を払わなければなりません。また、どの文献をどのように参照したかは、学界の慣行に従った表示方法で明らかにしなくてはいけません。この慣行をきちんと守ることは、皆さんが学問の世界に参加しうる十分な注意力と資格を備えていると証明することでもあるのです。

この小冊子は、文献で得た情報を自分の論文の中で活用するための「要約」「言い換え」「引用」などの作法や、絶対に避けるべき「剽窃」についての考え方、また英語で学術論文を執筆する際に参照した文献を表示する方法について説明したものです。

学問の世界に踏み出す今、その基本的なルールをしっかり身につけて下さい。

# 1 文献を表示する —APA 形式—

## Documenting sources: APA formatting and style guidelines

皆さんが、学術論文を執筆する能力を十分に備えているかどうかは、参照した文献についての情報を、正確に表示できているかどうかによっても判断されます。従って、学術論文を執筆する際には、広く用いられている出典表記や文献記載の形式を忠実に守る必要があります。そしてそれは、大文字・小文字の区別、句読法など、細かな点にいたるまで、一貫したものでなくてはならないのです。

英語による学術論文には、文献を表示するための形式がいくつかあります。それぞれの形式によって、盛り込むべき情報（文献の題名、著者の姓名、発行年、出版地、出版社など）の表示方法について細かい規則が定められています。大学の授業でレポートを書いたり、卒業論文を書いたりする場合には、指導する教員からどの形式に従うべきか指示があることでしょう。また、将来、皆さんが書いた論文や本を出版する場合には、学会や出版社が定める形式に従う必要があります。

文献の表示は主に二つの要素から成っています。参照・援用したデータや考えなどが、他の文献から得たものであることを本文中に示す**出典表記**（**in-text citation** といいます）と、一貫した文献記載の方法に従って論文の別の箇所（通常、本文の最後）により詳しい情報をまとめる**文献一覧**（これを **references**、**works cited**、**bibliography** などといいます）です。

例えば、心理学・応用言語学の分野では、APA (American Psychological Association) と呼ばれる形式が広く使われています。APA における出典表記では、(Mugglestone, 2005) というように、著者の名前 (Mugglestone) と出版年 (2005) を表記するのが一般的な表記方法です。一方で人文学の諸分野でより広く使用される MLA (Modern Language Association) による形式では、出典表記の際に、著者の名前とページ数を次のように表記します (Simmons and Malloy 53–58)。どちらにせよ、文献表示の形式は恣意的であり、唯一の「正しい」表示方法があるわけではないということを心に留めておきましょう。

この小冊子では、心理学などの分野で広く使われている APA マニュアル [*Publication Manual of the American Psychological Association* (6th ed., 2010)] による形式を詳しく解説します。この形式を採用したのは、これが多くの学術書で使用されているのみならず、他の形式にも応用しやすいという理由からです。この小冊子の最後に載せた文献一覧には、APA だけでなく、社会科学、人文科学、自然科学など様々な分野で広く使われている形式を解説したマニュアル類が載せてあります。どの形式を使うにしても、出典表記と文献記載については、一貫して一つの形式に従うことが大切です。

# 2 要約

## Summarizing

他の文献から得た情報を自分の論文の中で活用するための最も一般的な方法は、その要点を自分の言葉でまとめ、表記する手法です。文献を要約するにあたって注意すべき点は、必ずその出典を明らかにしなければならないということです。自分の言葉で書いているからといって、自分の意見として扱っていいというわけではありません。7 章で詳しく述べる APA 形式に従い、出典を明記しましょう。例えば、論文を書く際に、紅茶にミルクを加えることでカテキンの吸収率に影響があるかを調べた van het Hof, Kivits, Weststrate, and Tijburg (1998) という論文を参考にしたとします。この実験の目的、手法と結果について、自分の論文中で言及したい場合には、以下のように要約することができます。

> Van het Hof, Kivits, Weststrate, and Tijburg (1998) investigated whether adding milk to black tea would prevent catechin absorption. In this experiment, the researchers had two groups of participants consume plain black tea or black tea with milk and measured the catechin level in their blood over eight hours after tea consumption. They found that the effect of milk was only negligible.

要約する時、自分の論文の中で他の文献に含まれる全ての情報を繰り返すことは必要でないばかりか、肝心の自分の主張からも焦点がはずれてしまいます。原文に含まれる情報のうち、自分の主張と関係がある部分のみを簡潔に要約することが大切です。

# 3 言い換え
## Paraphrasing

他人の考えを要約するとき同様、言い換えをする時にも出典をあげなければなりません。言い換えは、要約よりも狭い範囲の情報量を自分の言葉で表現するときに使います。

例えば、皆さんがさまざまな文字の体系の起源についての論文を執筆していて、以下の一節を読むと仮定しましょう。この一節は Nicholas Ostler 著、*Empires of the Word: A Language History of the World* (New York: Harper Collins Publishers, 2005) という本の 154 ページにあります。

> Egypt's writing system is strange in that it has no known precursors. The first hieroglyphic inscriptions, on seals, cosmetics palettes, epitaphs and monuments, though they may be short, are well formed in the system that was to persist for the next 3500 years. They use pictures phonetically, making an illustrated word's characteristic consonants do multiple duty, as if a picture of a knife were to stand in English not just for 'knife,' but also for 'niffy,' 'nephew' and 'enough'.

この一節の言い換えをするにあっては、次のような書き方は許されません。なぜなら、この文章は上記の一節にある Ostler の考えをそのまま真似たことが明らかだからです。

**悪い例** Bad example

> The writing system used in ancient Egypt was unusual because it was like none that came before. The first writing in hieroglyphics, although brief, was fully developed in the form that would remain for the following three-and-a-half millennia. The system uses images to represent sounds, and each consonant in an illustrated word performs more than one task. It is as if an image of a gun were to represent in English not only "gun" but "again," "goner," and "goon."

このような言い換えを行うにあたっては、ここに書かれている考えの元にあるもの、つまり出典に言及しなくてはなりません。“Ostler (2005) explains that the writing system used in ancient Egypt was unusual because...”という具合に、Ostlerの名前に触れるといったやり方があります。

Ostlerの考えに自分自身の解釈を加えたり、それをより広い文脈に当てはめようとする時は、それなりの書き方を工夫しなくてはいけません。例えば、次の文章では、前半（網掛け部分）でOstlerの考えが要約され、後半（“the lack of...” 以下）で新しい考えが提示されています。

While Ostler (2005) points out that the writing system used in ancient Egypt is unusual in that it seems to have been born fully formed as a system that would remain intact for three-and-a-half millennia, the lack of archaeological evidence of earlier forms does not eliminate the possibility that previous Egyptian writing systems did exist but only in media, such as wood or mud, that have since perished.

一般常識となっている情報、あるいは多数の独立した情報源から得られる情報については、出典に言及する必要はありません。歴史的事実、生没年、科学の原理、広く知られている情報は、引用して扱う必要はありません。

The Special Theory of Relativity proposed in 1905 by Albert Einstein (1879-1955) provided mankind with a completely new view of the universe, particularly the notion that no fixed reference points exist.

上の文の中に含まれている情報はすべて、文献その他の多くの情報源の中に存在します。従って出典の明示は必要とされません。

# 4 引用

## Direct quotation

他の人の言葉を直接使用するときは、その言葉を引用符で囲み、出典を示さなければなりません。引用については、どうしても必要なときだけにとどめるようにしましょう。例えば、用語を定義するときや、特筆すべき主張等をそのまま引用することによって、自分の考えをより効果的に提示できる場合がそれにあたります。

もし皆さんが自分の論文の中で、5 ページ目で引用された Ostler の本の一節にある重要な語句を用いようとするなら、引用符を用いて、その語句がどこからきたのかを示さなければなりません。

> Neither of the two main components of the Japanese writing system, kanji and kana, is completely original; most kanji are taken directly from Chinese *hanzi*, while the kana are abbreviated forms of kanji. Similarly, the letters of the English alphabet can be traced to characters in the Latin, Greek, and other writing systems of Europe and the Middle East. In contrast, the writing system used in ancient Egypt has "no known precursors," and even the earliest examples of Egyptian writing were "well formed in the system that was to persist for the next 3500 years" (Ostler, 2005, p. 154).

引用文に変更を加える場合には、そのことを明示しなくてはなりません。引用しようとする文や語句の一部を省略したり、変更する場合は、省略符号 (. . .) で省略の箇所を、角カッコ ([ ]) で変更の箇所を示します。

> Ostler (2005) notes that "the first hieroglyphic inscriptions. . . are well formed in the [Egyptian writing] system that was to persist for the next 3500 years."

引用部分の意味がよりわかりやすくなるように、原文にはなかった [Egyptian writing] が追加されています。

もし原文に間違いが見つかった場合は、それが原著者の間違いであって、引用にあたって犯した自分の間違いではないことを読者に示すため、該当の箇所の後に *sic* という言葉（「このように」という意味のラテン語）を角カッコに入れて書きましょう。以下の例では “occured” ではなく “occurred” が正しいことを示しています。

The *New York Times* reported the incident online on December 13, 2003: “The police did not say how the officer died, but said they were not looking for any suspects in the shooting, which occured [*sic*] at 11:57 outside 328 West 53rd street.”

また、原文の趣旨を変更してはいけません。5 ページ目で引用された Ostler の本の一節では、エジプト文字の体系は、これに先立つ他の文字体系がないため「不思議だ」とされています。ですから、次の引用の仕方は誤りです。Ostler の言葉を前後関係から切り離し、彼が別の理由でエジプト文字の体系を不思議だと考えていたように書いているからです。このような引用は、原著者の意図を著しく歪めることになります。

**悪い例　Bad example**

In *Empires of the Word: A Language History of the World* (2005), Nicholas Ostler wrote that “Egypt’s writing system is strange” because it makes “an illustrated word’s characteristic consonants do multiple duty.”

広く一般に用いられていて、出典の著者独自の考えとは言えない語句に引用符をつける必要はありません。Ostler の文章の “no known precursors” と “well formed in the system that was to persist for the next 3500 years” という一節は Ostler によってなされた重要な主張であり、一般的な表現ではありません。従って、もしそれらの表現を用いるなら、引用符に入れなくてはなりません。それに対して “hieroglyphic inscriptions” という句は一般的な表現であり、独創的な考えを表すわけではありません。従って皆さんは、この句を別の文脈で、引用符なしで用いることができます。

The languages of the world have been written in many ways, from the hieroglyphic inscriptions of Egypt and the ideographic characters of China to the phonetic alphabets of Europe.

用いられている語句が一般的かどうかを確かめるためには、Googleや他の検索エンジンでその語句を探してみましょう。もし（“hieroglyphic inscriptions” がそうであるように）違う文脈で使われた例が何百件も何千件もヒットするなら、その語句はおそらく引用符を付けずに安心して用いることができます。もし検索エンジンの結果が不確かであれば、大事を取ることにしましょう。その語句を引用句として扱い、出典をあげるのです。

引用にあたっては、一重引用符（‘ ’）か二重引用符（“ ”）のどちらかを使います。一重引用符はたいていのイギリス英語の出版物の中で用いられ、二重引用符はほぼ全てのアメリカ英語の出版物の中で用いられています。以下に示すのは Ostler (2005, p. 517) の一節ですが、そこではイギリス式が用いられています。

> It is also just possible that some features seen in Irish English, such as ‘I’m after finishing my work’ and ‘I saw Thomas and he sitting by the fire’, imported from typical phraseology in Irish, are features that happen to go back to the language spoken here before the Celts even got here.

APA 形式では、引用の際には、二重引用符を用いるように定められているため、皆さんはそちらを使用しましょう。引用符内の引用については、一重引用符を用います。例えば、もし皆さんが、Ostler が引用しているアイルランド英語の例を含めて、この一節の一部を引用するとすれば、APA 形式では、以下のように体裁を整えることになります。

> Ostler (2005) suggests that perhaps “some features seen in Irish English, such as ‘I’m after finishing my work’ and ‘I saw Thomas and he sitting by the fire,’ . . . are features that happen to go back to the language spoken” (p. 517) in Britain before the arrival of the Celts.

３～ ４ 行以上に及ぶ長い一節を引用する時は、引用符を用いるのではなく、その一節の左端をインデントし、前後の段落との間を１行ずつあけます。

Neither of the two main components of the Japanese writing system, kanji and kana, is completely original; most kanji are taken directly from Chinese *hanzi*, while the kana are abbreviated forms of kanji. Similarly, the letters of the English alphabet can be traced to characters in the Latin, Greek, and other writing systems of Europe or the Middle East. The Egyptian writing system was different, though. As Ostler (2005) notes:

> Egypt's writing system is strange in that it has no known precursors. The first hieroglyphic inscriptions, on seals, cosmetics palettes, epitaphs and monuments, though they may be short, are well formed in the system that was to persist for the next 3500 years. (p. 154)

If Egyptian hieroglyphics did evolve from an earlier system, then the archaeological evidence for that evolution has not yet been found.

# 5 翻訳
## Translation

他の言語で書かれた文献にある語句や文を、自分で翻訳して引用する際は、引用符を用いた上で、出典をあげなければなりません。20 世紀の日本の外交について英語で論文を書いていて、以下の一節の一部に言及したいとしましょう。入江昭著『日本の外交』（中央公論新社、1966、2005 年）の 154 ページです。

> 朝鮮戦争勃発（一九五〇年）以後、アジアの国際関係には柔軟性が失われ、米ソ対決、ついで米中対決の枠ができていったという事実こそ、戦後日本の外交にとってもっとも重大なできごとであった。

この一節を英語に翻訳した上で引用する場合は、自分の訳を引用符に入れ、さらにそれが自分の訳であるということを示しましょう。次の例に見られるように、出典表記の際、ページ数の後にセミコロン（;）を打ち、my translation と付け加えます。

> As Iriye wrote (1966, 2005, p. 154; my translation), “the most important event for postwar Japanese diplomacy was the loss of flexibility in international relations in Asia after the outbreak of the Korean War (1950) and the formation of the U.S.-U.S.S.R. and U.S.-China confrontational frameworks.”

ただし、後でまた同じ文献から引用するときは、“my translation” を繰り返す必要はありません。

英語論文を書いていて、日本語の一節を翻訳した上で引用したいとします。この一節に、もともと英語で執筆（発言）され、後に日本語に翻訳された箇所が含まれている場合には、もとの英語の表現を正確に引用できなければ、引用符を用いることはできません。例えば、入江昭の同書 162 ページには次の一節があります。

「国際共産主義は一つのものだ」というダレス国務長官の考えをアジアにもあてはめた結果、ヨーロッパにおいて米ソ勢力圏がほぼ安定しているのと同じように、アジアにおいても反共体制を固め、軍事協定を通じて共産国家の膨張を防ぎ、しかも同時に、共産陣営に属する国を攻めることもせず、これとなんらかの形で妥結することもしなかった。

John Foster Dulles によって話された、もしくは書かれた「国際共産主義はひとつのものだ」に対応する英文を見つけられなければ、例えば “International communism is a single entity” のような訳文を引用符に入れることはできません。なぜなら Dulles は、実際には “International communism is monolithic” とか “There is only one form of international communism” とか、あるいはもっと他の言い方、書き方をしたかもしれないからです。ですからここは引用符を付けずに、言い換えをしなければなりません。

As noted by Iriye (1966, 2005, p. 162), the application to Asia of Secretary of State John Foster Dulles’ monolithic view of international communism resulted in . . .

# 6 剽窃

## Plagiarism

引用符の使用と出典明記を適切に行わずに他の人の言葉を使用した場合、皆さんは剽窃の罪に問われます。

大学においてであれ、出版界においてであれ、さらに社会一般においてであれ、剽窃は知的分野における窃盗行為であるとされ、剽窃を行う者は厳しい非難を浴びるだけではなく、ときには処罰の対象となります。他人の研究に敬意をはらい、それが自分の研究ではなく原著者の研究成果であることを明確に示すことが、研究における誠実さです。どの学問の道を選ぶにせよ、剽窃が許されることはありません。これから学界に新しく一歩踏み入れる皆さんにおいては、知的活動を営む構成員として、今から誠実性を保つよう努めていくことが大切なのです。

東京大学教養学部は、剽窃についての明確な方針を提示しています。『履修の手引き』（平成 30 年度）には、次のように書かれています。

(3) レポート

授業によっては、担当教員の指示により、学生が提出したレポートに基づいて成績の評価を行うことがある。レポートは学生一人一人が自己の責任において作成するものであり、教員から特別な指示がない限り、他の学生と同一の内容のものを提出してはならない。

(4) 不正行為について

当然のことながら、試験の受験、およびレポートの提出は公正に行われるべきであり、不正行為は許されない。不正行為を行ったと認められた者は、その科目が開講されているセメスター期間中に履修した全科目（ターム科目を含む）の得点を無効とされ、追試験を受ける資格も与えられない。上記に加えて、２年次において不正行為を行ったと認められた者は、進学選択への参加資格および進学内定も取り消される。なお、不正行為に協力した者（レポートの場合は不正レポートの作成に協力した者）も、不正行為を行ったものとして同様に取り扱われる。

[一部省略]

・レポートで他の文章やデータを引用する場合には、引用符などで引用箇所を明示し、出典を明記しなければならない。また、授業担当教員が認めている場合を除いて、他人の力を借りて（レポートの複写を含む）作成してはならない。

時には、盗用の意図がないにもかかわらず、結果的に剽窃を行ってしまうということがあります。故意によらない剽窃という事例が多くあるのです。

論文を執筆する際には、ある主題について、多くの本や論文、さらには記事やウェブページを読むことになります。その内容を記憶するうち、それらの情報源に含まれていた独自の情報や表現・語句を知らず知らずのうちに自分の論文に取り込んでしまうのです。そのような意図せざる剽窃を避けるためには、以下のことを心がけることが大切になります。

・読んだ文献の一覧表を作る。
・自分の論文中に使う可能性のある情報や表現・語句について、それらを正確に記録し、情報源を書き留める。
・情報源については、文献記載の形式で要求される情報をすべて漏らさず記録する。

# 7 出典表記と文献一覧

Citation and references

この章では、APA マニュアル [*Publication Manual of the American Psychological Association* (6th ed., 2010)] による形式を詳しく解説していきます。

## 7.1 本文中の出典表記 In-text citation

### 7.1.1 著者が一人の場合

本文中の引用の基本的な書式では、著者の姓の後にコンマを入れ、続いて半角スペース、出版年を入れます。

例 1　A later study (Iwanaga, 1989) found that there are . . .

著者名が本文中で言及されている場合には、カッコの中は出版年のみになります。

例 2　As reported later by Iwanaga (1989), there are . . .

著者名と出版年の両方が本文中で言及されている場合、カッコは必要ありません。

例 3　As Iwanaga reported in 1989, there are . . .

### 7.1.2 著者が二人以上の場合

**著者が二人いる**文献に関しては、両方の著者の姓を、引用するたびに出典表記に入れます。著者名をカッコ内に入れる場合は、二つの名前をアンパサンド（**&**）でつなぎます。

例 4　This claim has been disputed (Simmons & Malloy, 2001).

カッコの外側に表示する場合は、**and** を使います。

例 5　Simmons and Malloy (2001) have disputed this claim.

**著者が３人から５人**の文献の場合は、全員の姓を、最初にあらわれる出典表記のみに入れます。

例 6　Many factors are known to be involved (Hammon, Imaizumi, Chen, Shrode, & Golden, 1995).

二度目以降の出典表記では、最初の著者の姓のみを書き、その後ろに **et al.** と書きます。これはラテン語の「その他」という意味の句の省略形です。**al** の後にピリオドがつくことに注意してください。

例 7　The study mentioned above (Hammon et al., 1995) also showed that . . .

この省略形を用いた書式は、**著者が６人以上**の文献の引用すべてに使います。たとえば、2006 年に書かれた論文の著者が Michael J. Alio, Andrew T. Byrnes, Aimie L. Dougherty, Reena Knapik, Nerick Ng, Christina W. Thompson と記されているとすると、最初の出典表記も二度目以降の出典表記も

例 8　(Alio et al., 2006)

となります。

### 7.1.3 組織などによる出版物の場合

公共機関、法人、学会などの組織などによって著された出版物の場合は、その組織の名称を書きます。

例 9　(United Nations, 2004)

組織の名称が長いときには、最初の出典表記では正式名称を書き、その後に続けて角カッコ ([ ]) の中に略称を書きます。それ以降の出典表記では略称を用います。

例 10　This study is based on government statistics (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology [MEXT], 2005) . . . In the statistics mentioned above (MEXT, 2005), there is . . .

### 7.1.4 著者名がない場合

文献に著者名が記載されていない場合は、文献一覧に載せた項目の最初の数語を書きます（7.2.1.6 及び 7.2.1.8 を参照）。論文など短い文献は引用符でくくり、単行本などはイタリック体で表します。

例11 A similar assertion can be found on the Internet (“Not All Conspiracies,” 2007). In the apparently self-published *Handbook for Maniacs* (2004), the anonymous author states that . . .

### 7.1.5 文献の特定の部分の出典表記

文献の特定の部分を引用したり参照したりする場合は、それがどのページにあるかを書きます。省略形の **p.** は 1 ページのみの場合、**pp.** は 2 ページ以上にわたる場合を表すことに注意してください。

例12 (Rundale, 1999, p. 23)
(Higuchi & Maeda, 1954, pp. 185–188)

オンラインの文献でページ数がないものについては、段落番号など、適切な識別記号を用いてください。

例13 (NoNymBlog, 2007, para. 8)

ここに現れる **para.** は **paragraph**（段落）の略です。

## 7.2 文献一覧 Reference list

論文で参照した文献はすべて、論文の末尾の文献一覧に載せなければなりません。文献はそれぞれの項目の最初の単語（著者名など）のアルファベット順に並べます。この時、冠詞で始まる場合には冠詞は無視し、その次の単語の最初の文字をアルファベット順にします。また、ぶら下げインデントを使用し、それぞれの文献の二行目以降をインデントします。ここでは、単行本、学術誌に掲載された論文、新聞、雑誌、視聴覚資料、オンライン文献を記載する方法を述べます。特殊な例についての詳しい情報は、APA マニュアルを参照してください。

## 7.2.1 単行本 Books

基本の形［著者が一人の単行本］

❶ ❷ ❸ ❹

Mugglestone, L. (2005). *Lost for words: The hidden history of the Oxford English Dictionary*. New Haven, CT: Yale University Press.

❺ ❻ ❼ ❽ ❾

❶ 著者の姓（Mugglestone）の後に、著者の名前（Lynda）のイニシャル（L.）を書きます。姓の後にコンマを、イニシャルの後にピリオドを打ちます。コンマとピリオドの前にはスペースを入れず、後にそれぞれ１スペース（以下、すべて半角スペース）あけることに注意してください。著者の名前がファーストネーム以外にもある場合は、それらすべてのイニシャルを書きます。たとえば、Theresa Hak Kyung Cha の 1982 年の著作の場合は、このように始めます。

**Cha, T. H. K. (1982).**

それぞれのイニシャルの後にはピリオドを打ち、１スペースあけることに注意してください。

❷ 本の出版年をカッコに入れます。

❸ ピリオドを打ち、その後に１スペースあけます。

❹ 書名をイタリック体で書きます。この本の書名は主要題目と副題の二つの部分から成っており、コロン（:）で区切られています。コロンの前にスペースは入れず、後に１スペースあけます。主題と副題の最初の単語（Lost, The）と固有名詞（Oxford English Dictionary ―辞典の書名）のみ、単語の先頭が大文字になります。

❺ ピリオドを打ち、その後に１スペースあけます。

❻ 本が出版された都市名（New Haven）を書きます。アメリカ合衆国内の都市であれば、州名の省略形の二文字を入れます。ここでの CT はコネチカット州を表します。他の国の場合、都市名と国名を明示します。

**Bursa, Turkey**

**Halifax, Canada**

**Shizuoka-shi, Japan**

本のタイトルページに複数の都市名が記載されている場合は、最初の一つのみを書きます。

❼ コロンで区切ります。コロンの前にはスペースを入れず、後に１スペースあけます。

❽ 出版社名。

❾ ピリオド。

### 7.2.1.1 著者が一人の場合

例14 Mugglestone, L. (2005). *Lost for words: The hidden history of the Oxford English Dictionary*. New Haven, CT: Yale University Press.

初版以降の版については、書名の後に第何版であるかを記します。

例15 Ghatak, S. (2003). *Introduction to development economics* (3rd ed.). London, United Kingdom: Routledge.

ここに現れる 3rd ed. は Third edition（第３版）の略です。

### 7.2.1.2　著者が二人から７人の場合

それぞれの姓名をコンマで区切り、最後に現れる名前の前にアンパサンド（**&**）を入れます。

例16 Boykin, A., & Schoenhofer, S. O. (2001). *Nursing as caring: A model for transforming practice*. Sudbury, MA: Jones and Bartlett.

Blank, J., Exner, P., & Havlíček, M. (1994). *Hilbert space operations in quantum physics*. New York, NY: AIP Press.

### 7.2.1.3　著者が８人以上の場合

初めの著者から６人目までの著者の姓名を表記し、三点リーダ（...）で省略を示した上で、最後の著者の姓名を書きます。

例17 Berman, A., Snyder, S. J., Levett-Jones, T., Dwyer, T., Hales, M., Harvey, N., ... Stanley, D. (2012). *Kozier and Erb's fundamentals of nursing* (2nd ed.). Frenchs Forest, Australia: Pearson Australia.

### 7.2.1.4 編著の場合

編著（編者が、複数の著者の論文などをまとめた本など）については、**編者が一人**の場合は、編者の姓名の後にカッコに入れて **Ed** と書き、**編者が複数**いる場合は **Eds** と書いて、その後ろにピリオドを打ちます。**Ed.** は **editor** を、**Eds.** は **editors** を略したものです。他の項目同様、カッ

コの後にもピリオドを打つことを忘れないようにしましょう。

例18 Bishop, A. J. (Ed.). (1988). *Mathematics education and culture*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic.

Millán-Zaibert, E., & Salles, A. (Eds.). (2005). *The role of history in Latin American philosophy: Contemporary perspectives*. Albany, NY: State University of New York Press.

**編著に収められた論文や独立した章**については、最初に執筆者名と、その論文あるいは章の題目を書き、**In** という語を入れた後に、本（編著）全体についての情報を記します。論文や章のタイトルはイタリック体にせず、本（編著）の書名のみイタリック体で書きます。

例19 Van Wagenen, A. (2006). An epistemology of haunting. In S. Pfohl, A. Van Wagenen, P. Arend, A. Brooks, & D. Leckenby (Eds.), *Culture, power, and history: Studies in critical sociology* (pp. 155–168). Leiden, The Netherlands: Martinus Nijhoff.

この場合、A. Van Wagenen という人物について、執筆者名としては姓が先に書かれており、編者名としては姓が後に来ていることに注意してください。（他の編者名も同じです。）ページ数 (pp. 155–168) は、この論文 “An epistemology of haunting” が本のどの箇所に載っているかを表します。

### 7.2.1.5 組織などによる出版物の場合

著者あるいは編者が**組織など**の場合、その組織の正式名称を書きます。出版元が著者と同じ場合は、出版社を記載すべきところに **Author** と書きます。

例20 World Health Organization. (2007). *Global tuberculosis control: Surveillance, planning, financing: WHO report 2007*. Geneva, Switzerland: Author.

### 7.2.1.6 著者名がない場合

文献に著者名が記載されていない場合は、本の題名から始めます。

例21 *The new and complete American encyclopaedia: Or, universal dictionary of arts and sciences*. (1805). New York, NY: John Low.

### 7.2.1.7 翻訳書の場合

訳者名を書名の後に記し、その後ろに **Translator(s)** の省略形の **Trans.** をつけます。

例22 Murakami, H. (2000). *Norwegian wood* (J. Rubin, Trans.). London, United Kingdom: Random House. (Original work published 1987)

最後のカッコ内に表示されているのは、原著『ノルウェーの森』が日本で出版された年です。

### 7.2.1.8 百科事典の項目の場合

執筆者名がわからない場合は、項目の題名から始めます。以下の例は、百科事典の中の "Cosmopolitan" という項目です。

例23 Cosmopolitan. (1911). In *The encyclopaedia Britannica* (Vol. 7, p. 217). New York, NY: Encyclopaedia Britannica.

ここに現れる Vol. 7 は、Volume 7（第 7 巻）の略です。ページ数（p. 217）は、この "Cosmopolitan" という項目が、百科事典のどの箇所に載っているかを表します。

## 7.2.2 学術誌 Journals

学術研究の多くは、**学術誌 (journal)** に掲載される論文という形で発表されます。ほとんどの学術誌には号数がついており、連続したいくつかの**号 (issue)** がまとめられて、一つの**巻 (volume)** となります。現在は多くの学術誌が、紙に印刷したもの（印刷版）とオンライン版の両方で手に入ります。印刷された学術誌の一号分は、大抵、一般の雑誌のような形態になっています。一巻に収められるすべての号が発行されると、多くの場合、図書館で一冊あるいは複数冊のハードカバーとしてまとめて製本されます。オンライン版の学術誌は、大抵は印刷版の場合の慣習に従っていますので、論文は巻、号、ページ数で特定することができます。

基本の形［学術誌掲載論文］

Anderson, J. R. (2006). Managing employees in the service sector: A literature review and conceptual development. *Journal of Business and Psychology*, *20*(4), 501–523. doi:10.1007/s10869-005-9002-5

単行本の場合と同様に、はじめに執筆者の姓を書き、その後にコンマ、執筆者の名前のイニシャル、そしてカッコ内に入れた出版年と続けて、最後にピリオドを打ちます。次が論文の題目です（Managing employees in the service sector: A literature review and conceptual development）。論文の題目は、固有名詞および主要題目と副題の最初の単語のみを大文字で始めます。学術誌の名称（Journal of Business and Psychology）はイタリック体で、前置詞、接続詞、冠詞以外は単語の最初の文字はすべて大文字で書きます（前置詞、接続詞、冠詞も名称の先頭では大文字）。学術誌名の後にはコンマを打ち、イタリック体で巻数（20）を書きます。その後、号数をカッコ内に記入します。この時、巻数と号数の間にはスペースを入れないこと、また号数はイタリック体にしないことに注意しましょう。さらにコンマを打った後、論文の最初と最後のページ数を、ハイフンまたは半角ダッシュでつなぎます。学術誌のページ表記は数字のみで、p. や pp. は入りません。また、学術誌には都市名、出版社名を書きません。DOI と呼ばれる識別子が割り当てられている場合には、最後に DOI を表記します（DOI については、7.2.2.1 を参照のこと）。

学術誌のページ数の表示方法には二通りあります。巻ごとにページ数が振られている場合は、一つの巻に収められるすべての号を通してページ数が振られてゆきます。たとえば、第一号の最後が 128 ページであれば、その巻の第二号は 129 ページから始まります。一号単位でページ数が振られている学術誌の場合、それぞれの号ごとに、1 ページから始められることになります。ほとんどの学術誌は巻ごとにページ数が振られています（7.2.2.1 参照）。

### 7.2.2.1　DOI のある論文

近年では、学術誌の多くが DOI と呼ばれる識別子を採用しています。DOI は、Digital Object Identifier の略で、オンラインの電子データに、数字とアルファベットを組み合わせて個別に付与される国際的な識別子です。各論文に固有の DOI を付与することによって、オンラインでの論文の特定を恒久的に、かつ容易にすることができます。

例24　Ziegler, N. A. (2014). Fostering self-regulated learning through the European Language Portfolio: An embedded mixed methods study. *The Modern Language Journal*, *98*, 921–936. doi:10.1111/modl.12147

DOI は通例、オンライン版学術雑誌論文の最初のページの右上に、版権関連情報とともに記載されています。最近では、印刷版の学術雑誌論文にも DOI が付与されているものが増えていますので、印刷版の論文を参照した場合でも、DOI が付与されていれば、引用文献に記載することが

推奨されています。DOI は、文献情報の末尾に記載します。doi と小文字で書き、コロン（:）の後にスペースを空けずに DOI の数字と記号を続けます。DOI が付与されていないオンライン文献の記載については、7.2.2.2「DOI のない論文」及び 7.2.5「その他のオンライン文献」を見てください。

次は一号ごとにページ数の振られた学術誌に掲載された**執筆者が二人**の論文の例です。

例25 Ndulu, B. J., & O'Connell, S. A. (1999). Governance and growth in sub-Saharan Africa. *The Journal of Economic Perspectives, 13*(3), 41–66. doi:10.1257/jep.13.3.41

この例において、*13*(3) は、この論文が第 13 巻（Volume 13）の第三号（Issue 3）に掲載されていることを表します。巻数はイタリック体ですが、号数はそうではないこと、また巻数とカッコとの間にスペースが入らないことに注意してください。

学術誌に掲載された論文の**執筆者が二人から７人**の場合、すべての執筆者の名前を記します。

例26 Jun, J., Kim, J., Lee, H., & Jun, S. (2006). The prosodic structure and pitch accent of Northern Kyungsang Korean. *Journal of East Asian Linguistics,15*, 289–317. doi:10.1007/s10831-006-9000-2

学術誌に掲載された論文の**執筆者が８人**以上の場合、最初の著者から 6 人目までの著者の姓名を表記し、三点リーダ（…）で省略を示した上で、最後の著者の姓名を書きます。

例27 Gilbert, D. G., McClernon, J. F., Rabinovich, N. E., Sugai, C., Plath, L. C., Asgaard, G., … Botros, N. (2004). Effects of quitting smoking on EEG activation and attention last for more than 31 days and are more sensitive with stress, dependence, DRD2 A1 allele, and depressive traits. *Nicotine and Tobacco Research, 6*, 249–267. doi:10.1080/14622200410001676305

### 7.2.2.2　DOI のない論文

DOI のない論文については、DOI のある論文を記載する方法 (7.2.2.1) に従い、DOI 以外のすべての情報を明記します。

### 7.2.3 新聞・一般雑誌 Newspapers/Magazines

**執筆者名が記されていない新聞記事**などの文献記載は、記事の題名から始めます。

例28 Invasion of Nigeria: British punitive expedition routs the Emir and occupies Kano. (1903, February 15). *The New York Times*, p. 4.

この場合、年の表記が月日の前に来ることに注意してください。

**執筆者名が明示されている場合**は、その姓名を最初に書きます。もしその新聞が**国際的によく知られたものではない場合**、また異なる場所で、類似したあるいは同一の名称の新聞が発行されている場合は、角カッコに入れて出版された都市名を示します。

例29 Fredericks, I., & Prince, N. (2008, December 31). Thousands of matrics still waiting for marks. *Cape Argus* [Cape Town, Republic of South Africa], p. 1.

### 7.2.4 視聴覚資料 Audiovisual media

**映画**についての情報を記載する場合、監督、プロデューサー、あるいは脚本家といった、制作に関わった人名を書きます。その資料が映画であることを明示し、制作国と制作した映画会社名を記します。

例30 Trent, B. (Director & Producer), & Kasper, D. (Writer). (1992). *The Panama deception* [Motion picture]. United States: Empowerment Project.

**録音された音声や音楽**の情報を記載する場合は、その資料の制作者あるいは作曲家の姓名、著作権の発生した年、題名を記し、**On** の後にイタリック体でアルバムなどの題名、角カッコに入れた媒体名（CD、レコードなど）、レコード会社などの所在地とその名称を書きます。録音者が制作者や作曲家と異なる場合は、題名の後の角カッコ内に **Recorded by** に続けてその姓名または組織名を記します。録音された年と著作権発生の日付が異なる場合は、最後にカッコ内に入れた録音年を書きます。

例31 Wilson, B. (1964). I get around [Recorded by The Langley Schools Music Project]. On *The Langley Schools Music Project: Innocence and despair* [CD]. Hoboken, NJ: Bar/None Records. (1977)

## 7.2.5 その他オンライン文献 Other online sources

インターネット上にある資料の文献記載においては、読者が、将来も同じ資料にアクセスすることができるよう、十分な情報を載せておく必要があります。もっとも簡明なのは、その資料の完全な URL と、その資料を閲覧した日付を記しておくことです。日付を記すのは、オンラインの資料が変更されたり、消去されたりすることがあるためであり、それ以前の版が Internet Archive (www.archive.org) などのサイトに存在する可能性があるためです。下に示すのは典型的な例です。引用されている資料は、題名が "Indian National Army: Breaking traditions" で、National Archives of Singapore という組織による Historical Journey of the Indian National Army というシリーズに収められているものです。以下は、この小冊子作成のため、2015 年 2 月 23 日に閲覧したものです。このページには著作権発生の年（2003）と、固有の URL（http://www.nas.gov.sg/archivesonline/online_exhibit/indian_national_army/breaking.htm）が示されています。

例32 National Archives of Singapore. (2003). Indian National Army: Breaking traditions. In *Historical Journey of the Indian National Army*. Retrieved February 23, 2015, from http://www.nas.gov.sg/archivesonline/online_exhibit/indian_national_army/breaking.htm

オンライン文献の場合は、末尾にピリオドを打たないことに注意してください。また資料を閲覧した日付は **Retrieved** という語の後に記します。

資料が個人によるものである場合、その人物の名前を、姓、名の順で、最初に記します。**ブログや掲示板、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）のサイト**の場合は、サイト名の前に **Message posted to** と書きます。以下にその例を挙げます。

例33 Sullivan, A. (2009, January 2). Some truths for now. Message posted to *The Daily Dish*. Retrieved November 24, 2017, from http://www.theatlantic.com/daily-dish/archive/2009/01/some-truths-for-now/207174/

資料に**著者名が記載されていない場合**には、資料の題名から始めます。資料に日付がない場合は no date を意味する n.d. と書きます。

例34 Public proxy servers. (n.d.). Retrieved November 24, 2017, from http://www.publicproxyservers.com/

資料の URL が長い場合、あるいは一時的なものである場合は、そのウェブサイトのトップページか、資料が容易に見つかるページの URL を代わりに載せておきます。たとえば、資料の掲載されているイギリス外務省（U.K. Foreign & Commonwealth Office）のURLが https://www.gov.uk/government/publications/government-response-to-the-foreign-affairs-committee-report-on-the-fcos-human-rights-work-in-2013 となっています。このような長い URL は、ブラウザで正確に打ち込むことが難しいため、参照したページを探しやすいように、同じサイト内のより検索しやすいページ（ここではサイトのトップページ）を提示します。

例35 Foreign & Commonwealth Office. (2015). Government response to the Foreign Affairs Committee report on the FCO's human rights work in 2013. In Promoting human rights internationally. Retrieved November 24, 2017, from www.fco.gov.uk

## 7.3 日本語その他の非英語文献 Citing non-English sources

日本語、中国語、あるいは韓国朝鮮語で書かれた文献を記載する際には、著者名、題名を、一般的な転記法に従ってローマ字に書き直した後、原語の文字を記載し、さらに題名に英語訳をつけます。原語による文字表記があれば読者が文献を探しやすくなりますし、英語訳がついていれば、原語表記が読めない読者にも、文献の内容が推測できるようになります。（APA マニュアルには、原語の文字表記を行うかどうかについての記載がありません。この小冊子が推奨する形式は、この点で APA 形式と異なっています。）

日本語文献の例を三つ、以下に示します。まず単一著者の単行本の場合です。

例36 Kibata, Y. [ 木畑洋一 ]. (2008). *Igirisu teikoku to teikoku shugi* [ イギリス帝国と帝国主義 . The British empire and imperialism]. Tokyo, Japan: Yushisha [ 有志舎 ].

次は、編著者が編纂した論文集の中の論文の場合です。

例37 Oshima, M. [ 大島まり ]. (2008). Shutcho jugyo ni miru kagaku komyunikeshon [ 出張授業にみる科学コミュニケーション. Science communication in outreach classes]. In Y. Fujigaki [ 藤垣裕子 ] & Y. Hirono [ 廣野喜幸 ] (Eds.), *Kagaku komyunikeshon ron* [ 科学コミュニケーション論. On science communication] (pp. 145–157). Tokyo, Japan: Tokyo Daigaku Shuppankai [ 東京大学出版会 ].

最後は、オンラインの新聞記事の場合です。

例38 Tokushu: Hajimaru eko seikatsu [特集：始まるエコ生活．Special report: The start of an ecological lifestyle]. (2009, January 3). *Mainichi Shinbun* [毎日新聞]. Retrieved January 12, 2009, from http://mainichi.jp/

日本語、中国語、韓国朝鮮語のローマ字表記は、その言語において一般的に用いられている形式を一貫して使用します。日本語においてはヘボン式が推奨されていますが、訓令式でも構いません。ローマ字表記についてのより詳細な情報は、東京大学教養学部英語部会のホームページに掲載されている「日本語のローマ字表記の推奨形式」（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/eigo/romaji.html）を参照してください。

一般的には、ギリシア語、ロシア語、ヒンディー語、アラビア語のような、**ローマ字以外の表音文字のみで書かれる言語**の文献の場合は、ローマ字転記と翻訳だけを記し、原語の文字表記は含めません。

例39 Trifonov, Y. (1979). *Utoleniye zhazhdy: Roman i rasskazy* [Quenched thirsts: A novel and short stories]. Moscow, Russia: Profizdat.

フランス語やドイツ語、ベトナム語のような、**ローマ字で書かれる言語**による文献の場合は、原語の題名と翻訳を記します。その場合、原語のアクセント記号、声調記号などは、出来る限り元の形通りに再現します。

例40 Camus, A. (1942). *L'étranger* [The stranger]. Paris, France: Gallimard.

APA 形式の論文例

（本文）

The primary purpose of massive monolingual dictionaries such as the *Deutsches Wörterbuch (DWB)* or the *Oxford English Dictionary (OED)* is scholarship, even science. Both the DWB and OED are "committed to scholarly principles" (Christmann & Schares, 2003, p. 11), and from its earliest days "science was ... made central to the OED's achievements and execution" (Mugglestone, 2005, p. 110). For the typical student or language learner, however, such lofty ideals yield a comprehensiveness that can interfere with the task of determining what words mean and how they are used in everyday contexts. These practical goals have been the primary focus of English-Japanese lexicography in Japan (Ikegami, 2006),

particularly, as has been noted by Yagi (2006, p. 19), since the publication of the first edition of *Kenkyusha Shin Eiwa Chujiten* [Kenkyusha's New Collegiate English-Japanese Dictionary] in 1967.

（文献一覧）

**References**


Christmann, R., & Schares, T. (2003). Towards the user: The digital edition of the *Deutsches Wörterbuch* by Jacob and Wilhelm Grimm. *Literary and Linguistic Computing, 18*, 11–22. doi:10.1093/llc/18.1.11

Ikegami, Y. (2006). English dictionaries in Japan: Past, present, and future. In JACET Society of English Lexicography (Ed.), *English lexicography in Japan* (pp. 2–17). Tokyo, Japan: Taishukan Publishing.

Mugglestone, L. (2005). *Lost for words: The hidden history of the Oxford English Dictionary*. New Haven, CT: Yale University Press.

Yagi, K. [ 八木克正 ]. (2006). *Eiwa jiten no kenkyu: Eigo ninshiki no kaizen no tame ni* [ 英和辞典の研究 : 英語認識の改善のために. A study of English-Japanese dictionaries: For the improvement of English awareness]. Tokyo, Japan: Kaitakusha [ 開拓社 ].


## 7.4 文献情報管理ソフトウェア Reference management software

かつては、学生であれ研究者であれ、学術論文などを執筆する際は、出典表記や文献記載を手書きやタイプライターで処理しなければならず、形式を変更する場合は、すべて書き直したり、再度タイプしたりという苦労がありました。現在では、**EndNote** や **BibTeX** といった名称のソフトウェアを使うことで、これらの作業を効率的に行うことができます。またマイクロソフト・ワードにも、文献情報が管理できる機能が備わっています。こうしたアプリケーションでは、文献情報を、手作業によらず、オンラインのデータベースからも収集できます。また収集したデータを自動的に APA、MLA などの、定められた形式に準拠して配列することもできますので、単行本や学術論文の刊行など、学術研究の成果の発表に利用すれば、大幅に時間を節約することができます。ただし、こうしたソフトウェアを利用する場合でも、出典表記や文献記載の原理に精通し、自らの論文の細部に至るまで責任を持てるようにすることが重要です。

# 8 もっと詳しく知りたい人は・・・

## To find out more . . .

次の文献には、引用と出典記載についてのより詳しい情報が記載されています。


American Psychological Association. (2010). *Publication manual of the American Psychological Association* (6th ed.). Washington, DC: Author.

Kamimura, T. [ 上村妙子 ], & Oi, K. [ 大井恭子 ]. (2004). *Eigo ronbun repoto no kakikata* [ 英語論文・レポートの書き方. How to write a thesis/report in English]. Tokyo, Japan: Kenkyusha [ 研究社 ].

Modern Language Association of America.(2016). *MLA handbook* (8th ed.). New York, NY: Author.

Purdue University. (n.d.). Quoting, paraphrasing, and summarizing. In *Purdue Online Writing Lab*. Retrieved November 15, 2017, from https://owl.english.purdue.edu/owl/resource/563/1/

Purdue University. (n.d.). Avoiding plagiarism. In *Purdue Online Writing Lab*. Retrieved November 15, 2017, from https://owl.english.purdue.edu/owl/resource/589/1/

Sakata, S. [ 阪田せい子 ], & Larke, R. [ ロイ・ラーク ]. (1998). *Dare mo oshienakatta ronbun repoto no kakikata* [ だれも教えなかった論文・レポートの書き方. Tips for writing a thesis/report that nobody has given]. Tokyo, Japan: Sogo Horei Shuppan [ 総合法令出版 ].

University of Chicago. (2017). *The Chicago manual of style* (17th ed.). Chicago, IL: Author.

Van Leunen, M. (1985). *Eigo ronbun no kakikata handobukku* [ 英語論文の書き方ハンドブック. A handbook for scholars]. (S. Watanabe [ 渡部昇一 ] & K. Nagamori [ 永盛一 ], Trans.). Tokyo, Japan: Nanundo [ 南雲堂 ]. (Original work published 1978)

Yoshida, K. [ 吉田健正 ]. (2004). *Daigakusei to daigakuinsei no tame no repoto ronbun no kakikata* [ 大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方. How to write a report/thesis dedicated to undergraduate and graduate students] (2nd ed.). Kyoto, Japan: Nakanishiya Shuppan [ ナカニシヤ出版 ].

このパンフレットの作成に際し、以下の文献から有用な考え方や視点を得ました。これらも読まれることをお勧めします。


Currie, P. (1998). Staying out of trouble: Apparent plagiarism and academic survival. *Journal of Second Language Writing, 7*(1), 1–18. doi:10.1016/S1060-3743(98)90003-0

Deckert, G. D. (1993). Perspectives on plagiarism from ESL students in Hong Kong. *Journal of Second Language Writing, 2*(2), 131–148. doi:10.1016/1060-3743(93)90014-T

The Library, University of Lincoln. (n.d.). *Referencing handbook: APA*. Retrieved November 15, 2017, from http://guides.library.lincoln.ac.uk/ld.php?content_id=26426166

Macdonald, R., & Carroll, J. (2006). Plagiarism: A complex issue requiring a holistic institutional approach. *Assessment & Evaluation in Higher Education, 31*(2), 233–245. doi:10.1080/02602930500262536

Park, C. (2003). In other (people's) words: Plagiarism by university students: Literature and lessons. *Assessment & Evaluation in Higher Education, 28*(5), 471–488. doi:10.1080/02602930301677

Pennycook, A. (1994). The complex contexts of plagiarism: A reply to Deckert. *Journal of Second Language Writing, 3*(3), 277–284. doi:10.1016/1060-3743(94)90020-5

The Writing Center, University of Wisconsin-Madison. (n.d.). *Acknowledging, paraphrasing, and quoting sources*. Retrieved November 15, 2017, from http://www.wisc.edu/writing/Handbook/Acknowledging_Sources.pdf

Yamada, K. (2003). What prevents ESL/EFL writers from avoiding plagiarism? Analyses of 10 North-American college websites, *System 31*, 247–258. doi:10.1016/S0346-251X(03)00023-X


著作権：東京大学教養学部英語部会／グローバルコミュニケーション研究センター、2018

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

# 自分の言葉？
## ―知の営みに参加するために―
# 他人の言葉？

東京大学教養学部
英語部会／グローバルコミュニケーション研究センター